

「底が突き抜けた」時代の歩き方 366

テレビに抱きしめられた浮遊の戦後——日本人の敗北の仕方

第二次大戦後の世界を貫通してきた東西冷戦対立の終結によって、これまで覆い隠されてきた戦中、戦後の日本という国家が一举に明るみに引きずりだされてきた。91年の湾岸戦争において軍隊派遣を禁じる現行憲法を戴く日本は、当時の日本円で一兆円以上の資金援助をしながら国際社会の評価を得られず、戦争終結後、イラクの侵略を受けたクウェートがアメリカの新聞、雑誌に掲げた各国への感謝広告に日本の名前が掲載されないという理不尽な仕打ちを被らねばならなかった。99年3月から始まったNATOによるセルビア空爆では日本が関与することのないヨーロッパでの戦争であったにもかかわらず、日本と同様に第二次大戦の敗戦国として、軍事行使に関するさまざまな制約を受け、また自制してきたドイツが初めて空爆に参加することによって、逆に軍事行使の前に佇んでいる日本の位置を浮き彫りにすることになった。

9・11テロではパール・ハーバーとカミカゼとが結びつけられて、“リメンバー・パール・ハーバー”という反日感情を刺激しないために、在留邦人の外出を控えねばならなくなる事態も生じた。しかし、日本人からすれば、9・11テロはパール・ハーバー奇襲よりも、むしろ広島や長崎への原爆投下との比較のほうが妥当であった。9・11テロ以降のアメリカによるほとんど一方的なアフガン攻撃やイラク攻撃では、戦前、戦中を生きてきた多くの日本人に、十万人が戦死した東京大空襲をはじめ、日本各地でのB29による爆撃の記憶を鮮明に蘇らせたにちがいない。イラクに大量破壊兵器の廃棄を執拗に迫るアメリカの姿も、戦前の日本政府が到底のめない対日要求、いわゆる「ハル・ノート」を突きつけるアメリカの姿とダブるものであった。

しかしながら、今回のイラク攻撃でなんといっても敗北した50数年前の日本を蘇らせたのは、戦後イラクの復興について第二次大戦後の日本での占領政策を下敷きにするというブッシュ政権の構想である。強圧的な体制から民主主義への移行、復興の規模の大きさ、「異質な文化」度における日本とイラクの共通性、といった理由が挙げられているが、要するに、GHQの目に中世社会のように映った封建国家日本に、民主主義の仕組みや運営を手取り足取り教えた結果、アメリカの最も従順な同盟国の一つに育てあげたマッカーサーの占領政策の輝かしい成果をイラクの戦後復興に当てはめようとするものであった。

タリバン政権からのアフガン人の自由と解放を掲げてアフガンを攻撃し、そしてフセイン政権の圧制からのイラク人の自由と解放を謳ってイラクを攻撃したアメリカは、5

7年前も日本国民に、軍と国民とをはっきり区別した上で、日本国民は日本軍国政府にだまされている、軍国主義に従って破滅の道に進むのか、それとも軍国主義に従わずに理性の道に進むのか、を突き迫った。西欧社会以外の他国に対するアメリカの行動原理は一貫していたから、日本の占領政策の成功をイラクにも当てはめようとするのは、アメリカからすれば当然のことかもしれない。だが誰がみても、アメリカも呆れるくらい従順に占領を受け入れ、英語を街頭に氾濫させた日本人と、フセイン政権も嫌だが、アメリカ支配も嫌だから、アメリカ軍はイラクから出て行ってくれ、という態度を示すイラク人とは重なりそうになかった。

日本方式に基づくイラクの戦後復興には、したがって反対意見が多い。日本占領研究の学者たちは、日本占領が近隣のアジア太平洋諸国から支持されたことや、日本における天皇制の存在や、日本が石油などの天然資源を有しない国であることなどの理由を列記しながら、とくにアメリカに、日本占領政策に占領の三年前から多角的に取り組んできた態度がイラク占領計画にはみられないことを挙げて、反対を表明している。学者の立場からすれば、その反対表明は当然のようにみえるけれども、どこか納得しがたさを感じる。03年1月24日付の連名のその『訴え』（『世界』03. 4）には、こう主張されている。「一方、日本は、米国のイラク占領に『人道面』で支援することを目的として自衛隊をイラクに派遣する法案を準備していると伝えられている。日本人もまた、自らの被占領体験に照らして、いまなにがイラクへの『支援』に値するのか真剣に考えなければならない時を迎えている。」

納得しがたさはここに明確に記されている。「真剣に考えなければならない」のは、日本人が「自らの被占領体験に照らして、いまなにがイラクへの『支援』に値するのか」ということではない。日本人がいま「真剣に考えなければならない」のは、イラクへの「支援」から照らしだされている日本人「自らの被占領体験」そのものであり、それが戦後50数年にわたってどのような影響を及ぼしつづけているかという問題であろう。アメリカの占領政策によって日本が軍国主義から民主主義に見事に転換し、経済復興においてもアメリカの重要なパートナーにまで申し上がったということは、必ずしも日本の国家としての力量がアメリカと肩を並べるほどまでに高まってきたという意味あいよりも、従順さにおいて優等生にみえるほど日本はアメリカに上手に飼い馴らされてきたという意味あい以上のものではない。

イラクの戦後復興に「日本モデル」が提案されたとき、ほとんどの日本人が^{じくじ}忸怩たる思いに駆られたにちがいない。イラクも日本のようにアメリカにとっての「よい子」として調教されようとしているのか、という悲憤を感じないほうがどうかしていた。イラク占領が日本占領のようにうまくいく筈がない、という問題ではけっしてない。朝鮮戦争の対応を巡って解任されたマッカーサーは帰国後、「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」という言葉で有名な演説を行ったその中で、アメリカや西欧諸国が40歳くらいな

ら、日本はまだ12歳だといって、当時の日本人のプライドをいたく傷つけたが、今回の「日本モデル」構想にも現在の日本人はアメリカに（いや、世界のどの国からも）そうみられてしまうような、その程度の力量しかこれまで備えてこなかったことにもっと内省的になってもよかったし、内省的にならねばならなかった。

アフガン攻撃の時にも、また今回のイラク攻撃の時にも聞こえてきたのは、「アメリカに原爆を落とされた日本はどうしてそんなアメリカの味方ばかりするのか」という声であった。この声は日本がアメリカの優等生以外のなにものでもないことを立証するものであったが、原爆を投下したアメリカ人のこの声に対する応答はいつも明快であった。原爆投下があったからこそ、日本は滅びずに今日の繁栄があり、アメリカの優等生でいられるのではないかというものである。では当の日本人はこの声にどう応答しているのだろう。朝鮮半島における北朝鮮の脅威を前に、どうしても日米安保の立場から国連よりもアメリカに同調せざるをえないのだ、ということであれば、世界の各国にむかって堂々とそう説明すればよいのだ。だが、日本政府も日本人もはっきりとそう説明することはできない。わかってもらえないからではない。相手になんとしてでも訴えかけようとする言葉が内から突き上がってこないからだ。突き上がってこないのは、そう訴えかける自分たちの立場に懸けるなにものをも持たないからだ。

「なぜ日本人はかくも幼稚になったのか」と真正面から斬り結ぶように問いを發した文芸評論家の福田和也は、「幼稚というのは、頭が悪いとか、知識がないとかいうことでは」なく、「肝心なことに目をつぶっている、ということ」であり、「生命よりも大事なもの」を守るために、「自他の生命を超える方策をとる覚悟」を持っているかどうかだと説く。つまり、自分の命を懸けるに値するものを胸中深く沈めて生きているか、ということだ。思いとしてではなく、その覚悟がしだいに漲^{みなぎ}ってくるような生き方を日々模索し、追求しているか。これなくしては生きてはいけなようななにかを握りしめながら、生きているかどうかである。戦争に負けたから敗北なのではない。焦土と化して自らの胸中に広がっている廃墟から、両足で立ち上がって一歩も踏み出せなくなっていることが敗北なのだ。

戦後の日本は、一体なにが肝心であるかが分からなくなっていく歩みであった。「肝心なことに目をつぶっている」もなにも、「肝心なこと」について戦後の日本人は考えなくなり、「肝心なこと」はますます見えなくなっていく。問題はもちろん、そうなった状態にあるのではなく、なぜそうなってしまったかにある。年長の日本人が体験した60年前の戦争が戦後の日本人にとって非常に重要な意味を持つのは、その戦争が日清、日露戦争のような軍人のみの戦争ではなく、子供まで巻き込んだ徹底的な国家総動員による総力戦であり、その総力戦において敗北したからだ。家族に死者を出してまでの敗北だったから、生き残ったすべての日本人の骨身にこたえない筈がなかった。その上、GHQによって戦地での日本人の蛮行がこれでもかといった調子で連日発表されるのだ

から、敗戦直後の日本人が臓腑^{えぐ}を抉られるほどに打ちのめされたことは充分想像できる。

しかしながら、戦後生まれの我々が想像してみるほどのものではなかった。打ちのめされている場合ではなく、多くの日本人が逼迫^{ひつぱく}した日々の暮らしにことも無げに邁進^{まいしん}していったようにみえた。いうまでもなくそれは道理であり、どんなに悲嘆のどん底にあっても、人間に空腹は訪れるし、自分の身は自分だけの身ではなかったからだ。人間というものは内に身を引き裂かれるような深い傷心を抱えこんでいようとも、外では気丈に振る舞ってみせる存在である。外見を鵜呑みになぞできる筈もないとして、それでも大半の日本人が戦時中に骨身に沁み込んだことを、骨身に沁みたようにして自分の地歩を固めながら戦後を着実に踏み締めているようには到底窺えなかった。戦前、戦中にわたって国家によって骨身を削られるような構えをしいられてきたのであれば、戦後の国家がいかにそのような国家ではなくなったとしても、戦後の一人一人の歩みは削られてきた自分の骨身を回復し、より一層太らせるような営みを育んでいくのが人としての筋道というものではなかったか。

国家のために生きてきた日本人は戦後、当然のごとく国家のために生きなくなった。だからといって自分のためにも生きなくなった。会社のために生きるようになったのだ。国家のために生きることが畢竟、自分や家族のために生きることにつながるという戦前の考えは、会社のために生きることが自分や家族のために生きることだという戦後の考えに取って代わられることになった。国家のために生きることが一人一人の考えを掘り下げるなかからの多様さに裏打ちされたものではなく、国家によって命じられたことを従順に仕上げていくというマニュアルの遂行にしかすぎなかったように、会社のために生きるという戦後のあり方も、どのように仕事に取り組み、成就させていくことが会社のためになるのかという思考回路を経ず、ただ単に会社の方針に従って働きさえすればよいというマニュアルの遂行にほかならなかった。

国家のために生きることが所詮国家のために生きることであって、自分や家族のために生きることとは異なる。国家のために生きることがむしろ、自分や家族のために生きることが制約し、自分や家族の消滅に向かわせる。だから、敗戦という事態に遭遇して大半の人々が、空っぽになってしまった自分に初めて向き合わざるをえなくなった。このときに何度も立ち止まって本当に考えなければならなかった肝心なことは、国家のために生きてきた自分たちは完全にスポイルされてしまっているという問題であった。空っぽになってしまった自分たちの中に、国家以外のなにかを代わりに放り込めばよいという問題ではけっしてなかった。自分というものをいかに立て直すかという問題であった。もし自分を立て直すという発想が根本的であったなら、敗戦後の日本国家をいかに立て直すかという課題が視野に入っていない筈がなかった。国家のために生きてきた戦前の生き方が駄目であったなら、自分のために戦後生きていくことのなかに国家というものがどのように射し込んでくるのか、を突き詰める必要があった。

いうまでもなく国家のために生きてきたのは国民自身であって、国家ではない。自分たちが生きていくのにどのような国家であったほうがよいか、について考えるのは国民自身であって、国家ではない。身も心も回収されるようにして国家のために生きてきた戦時中の国民は戦後、もはや新たな国家のために生きようとしなくなった。それだけではなかった。国家と自分とのかかわりについても真剣に考えなくなった。あたかも国家について考えることが、国家のために生きてきた戦前の否定されるべき生き方に結びつくかのように、頭から国家が毛嫌いされるようになった。こうしてどのような国造りを戦後押し進めていくかという国民的課題は、人々の目標から回避されることになった。人々は目の前に突きつけられている生活の困窮からいかに抜け出し、より経済的に豊かになっていくかということにばかり視線を注ぐようになった。

なぜそうってしまったのか、その原因について二つのことが考えられる。一つは、やはり国家のために生きてきた戦前の日本人の生き方が徹底的に駄目だったことである。国家のために生きていくことが全てであって、その中に国民としての自分の力量が高まっていくようなことはほとんどなかった。つまり、国家のために生きていくことは国家をどのような方向へ導いていくかという問題であり、そのために国民一人一人がどのような総合的な力量を身につける必要があるか、という課題とは無縁であった。国家の奴隷であり、犠牲としての生き方でしかなかったから、そんな国家観しか植えつけられていなかった国民がGHQの厳しい統制下にあった敗戦後に、日本の新たな国造りに情熱を燃やすわけがなかった。戦前の日本国家は戦争に役立つ以外のことに目を向けられないような、従順なだけの者しか活用しなかったし、国民もまた自分をそのようにしか育ててこなかったのだ。

国家的課題が視野に入らないような国民は充実した国民とはいえないし、逆に国家的課題しか視野に入らない国民も充実した国民とはいえない。国家的課題ばかりを考えていても、国家のあるべき方向性は視えてこない。国家的課題について考えることは、できるだけ多くの非国家的課題について考えるなかでなされなければ、国家的課題というものは狭^{きょうさく}を免れえない。国家のために死ぬことばかり強制され、死ぬために戦地へと赴いた兵士が敗戦後に復員して、今後死ななくてもよい生活を味わうことになったとき、自分に死を命じてきた国家のあらゆる気配から身を遠ざけようとするのは当然であり、そこにこれからの新生国家について真剣に考える気分も余裕もなく、なにより国民としての力量が全く備わっていなかった。

敗戦後の新たな国造りとはいうまでもなく、新たな国民造りである。新たな国家を造りだそうとする新たな国民が生まれてこなければ、新たな国造りなぞ絵に描いた餅にすぎない。だが、敗戦後の日本に新たな国造りを目指す新たな国民なぞどこにもいなかった。戦前の日本国家は敗戦を予測していなかったもので、敗戦後の国造りなど念頭になかったし、新生国家にふさわしい国民が生みだされてくる土壌を全く耕していなかったの

で、国造りの構想も敗戦後の日本国民からは非常に遠かった。敗戦のショックや国民に死を命じてきた戦前の国家に対する反動などの諸事情を考えると、新たな国造りの気運が国民のなかに起こってこないのは無理からぬことであった。もちろん、最大要因は国民としての力量のなさにちがいがなかったが、力量というものは時間をかけて努めさえするなら、自ずから身についてくるものである。敗戦後も数年経過するなら、膨大な国民のなかから戦前の国家観のイメージを脱して、新たな国家観に基づく国造りを目指す雰囲気は自然に醸成されてくるにちがいがなかった。しかし、そんな雰囲気はどこにも沸き起こってこなかった。

敗戦後の日本国民は新生国家に対してどのような態度を示してきたかという問題は非常に根本的で肝心なことなので、もう少し踏み入っておかなくてはならない。敗戦は国民に深刻な衝撃をもたらす一方で、苛酷で不安と恐怖に満ちた戦争状態からの解放でもあった。敗戦によって萎縮した日々を過ごさざるをえなかった軍国主義の時代から漸く脱出し、明るい民主主義の時代が到来したことに喜んだ者も大勢いたことだろう。消極的にであろうと積極的にであろうと、全国民が戦前の時代から戦後の時代へと飛び移っただけのことで、自分たちの手で戦後の時代を驚嘆みにしたわけではなかった。戦前の船に乘せられてきたように、新しく用意された戦後の船に移り移っただけのことであつたから、戦後の時代は国民自身の手で作り出されたわけではなかった。このことは、国民には戦後の時代は本当にはまだ訪れていないことを意味している。

戦争に負ければ当然戦後はやって来るといふ自然現象的な意味あいではなく、戦後がいくらかでも新しい戦後性を帯びているなら、その新しさは造りだされる度合いでしか迫り上がってこない。敗戦後の日本国民は新しい戦後を造り出す新しい手を自らのどこにも持たなかった。したがって、新しい戦後を驚嘆むことができなかった。日本国民は時代の移り変わりをただ単に体験しただけであつて、新しい戦後に面接したわけではなかったのだ。戦後国家についても同様のことがいえる。敗戦後の日本国民は自分たちの精神面の深くまで強く介入してきた戦前の国家がなくなったことは知っていても、戦後国家が聳え立っている姿はどこにもみななかったし、みようとしなかった。

日本国家を立て直す課題は、日本国民が自らを立て直す課題にほかならない。自分たちのかかわらないところで勝手に天高く聳え立たされてきた戦前の国家に強制的に身も心も牛耳られてきたことを国民が心底反省するのであれば、新たな国造りに精力的にかかわり、自分たちが本当に歩まなくてはならない戦後を迫り出させる必要があつた。日本人にとってこのこと以外の肝心なことはなかった筈だ。新たな国造りを視野に入れた上での自分自身の立て直しが、日本国民の一人一人に50数年もの間ずっと問われつづけてきたのではなかったか。ところが、時間が経過すればするほど、問いへの応答は一層困難になり、問いそのものが掘り起こされずに地底に沈黙していくままに放置され、戦後日本は戦前のような誤りはおかさなくなった（日米同盟でおかせなくなった）けれ

ども、経済大国に見合った見識も主張も持たない、自主性のない、つまらない国に成り果ててしまった。

つまらない国の国民もつまらない。国は幼稚であっても国民は幼稚ではない、ということはある。国の幼稚さは国民の幼稚さの投影であって、その逆は起こりえない。国民は自らにふさわしい顔を国に被せるのである。国家に対する国民の義務と責任の自覚的な行使という課題から遠く懸け離れている日本人からすれば、日本国家が幼稚でどうでもいい国として国際的にみなされていることは、自分たちにかかわりないことであるが故に、どうでもいいことなのだ。日本人自身が幼稚でどうでもいい国民とみなされていることに気づこうとしないような国民であるからこそ、ますます日本国家は幼稚でどうでもいい国家に成り果てていくという悪循環のなかに、日本国民はずっと囚われてきた。その結果、憲法前文に明記されている、「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。」方向とは逆向きに位置するようになった。

自分を立て直し、国家を立て直す機会を一度も掴むことなく、戦後の日本人は自分を喪失する勢いで企業の中で勤勉さを発揮し、経済的繁栄を謳歌していった。他方で自分の立っている場所は深く見失われたまま、自分自身に対しても、同盟国のアメリカに対しても、右往左往する習性を身につけていった。思考停止は止まるところを知らなかった。「肝心なこと」がわからなくなった日本人以前の、「肝心なこと」を執拗に探り当てる思考の働きそのものが日本人を突き動かさなくなった。一言でいえば、考えることをしなくなった。ここにもう一つの原因が明らかにみられる。

バグダッドが猛爆に晒されている最中にさいたまスーパーアリーナで格闘技戦が行われ、数万の観客がリング上でのパンチやキックを繰り出す攻防に熱狂し、テレビ放映は29.1%の瞬間最高視聴率を記録したという。リングの外で本物の戦争が起こっているイラクでは多くの死傷者が続出しているのに、疑似イベントに興奮しているこの体たらくはなんだ、などというつもりはない。戦争の実況中継を茶の間で観戦している不気味さよりもマシだからではない。人間とはそういう存在でもあると思うからだ。この格闘技戦のテレビ放映で想起したのは、テレビが出回り始めた54年頃のプロレスブームである。力士出身の力道山がサンフランシスコからやってきたシャープ兄弟をはじめとするガイジンのプロレスラーを次々とやっつける光景に、日本中が興奮と熱狂の渦に包み込まれた。

敗戦の痛手がまだ各所に残っており、アメリカ人による占領が非公式に続いているなかでの、大男のアメリカ人レスラーを体格に劣る日本人レスラーが空手チョップを浴びせて叩きのめす場面の連続だったから、プロレスほど日本人の鬱屈を一気に吹き飛ばし、溜飲を下げた試合はなかった。蔵前国技館を埋め尽くした1万2千人の観衆だけではなく、日本各地の街頭に設置された27インチの一台のテレビのまわりに何千、何万もの

群衆が詰めかけて、試合のなりゆきに歓声をあげ、大騒ぎを繰りひろげた。シャープ兄弟戦の最初の試合は1千万から1千4百万人もの人が観たと推測され、翌日の夜の試合では日本の総人口の三分の一に相当する2千4百万近くの人々が観たとされる。リング上での凄惨な光景にショック死する人が続出したり、全国の少年が力道山のまねをして怪我が急増するという社会現象をさまざまに惹き起こしたりしたが、テレビはプロレスと二人三脚で敗戦後の状況からまだ抜け出せていない人々の心を驚愕みにしたといっても過言ではなかった。

いうまでもなくプロレスは、ショーほど素敵な商売はない、イベントであり、大男のアメリカ人レスラーから卑劣な反則を次々と見舞われながらも、じっと我慢していた日本人レスラーの堪忍袋の緒が切れて遂に怒りを爆発させ、こてんぱんに叩きのめすという情緒的でインチキ臭いシナリオが裏では用意されていた。しかしながら、インチキ臭かろうと何であろうと、プロレスのテレビ中継は敗戦で自信を失っていた日本人を全国民的な規模で大いに勇気づけたことは否めない。それはおそらく敗戦後初めての事態であった。敗戦ショックと生活の困窮に打ちひしがれた日本人に誇りを取り戻させた唯一のものがテレビであったということは、現在の日本人の「肝心なこと」がわからなくなってしまった幼稚さを考えると非常に示唆的である。なぜなら、所詮プロレスは仕組まれた八百長ショーであり、その試合から与えられた勇気や誇りというものは虚構のリングからその外へ一步も出るものではなかったからだ。

テレビのプロレス中継が敗戦後の日本人の心を熱狂的に捉えたことは、振り返ってみれば不幸なことであったと思う。「敗北を抱きしめて」はいなかったが、敗北に抱きしめられていた戦後の日本人は以降テレビを抱きしめ、テレビに抱きしめられるようになったからだ。他の先進諸国の人々と較べてあまりにも日本人がテレビに対してコミットしすぎて、距離が取れなくなり、テレビにたやすく介入されてしまう無防備ぶりは、50年前のプロレス中継に対する無条件の信頼に起因しているように思われてならない。このときのプロレス中継のような、日本列島を沸騰させる番組は二度と出現しなかったが、皇太子殿下の御成婚パレードが放映され、この頃テレビカメラの前で挙式する「テレビ結婚」という番組がスタートした。ケネディ米大統領の暗殺も初の衛星中継で飛び込んでくるほどに、テレビは進化していった。

テレビの本放送が始まった53年2月、110世帯を対象にして開局したテレビは56年3月には16万5千世帯にまで膨れ上がり、11月には30万世帯に増加し、毎年飛躍的に増えていく傾向を示した。当然青少年をはじめ社会に対するテレビの影響が問題視され、低俗な番組が批判の対象になりだした頃、評論家の大宅壮一は「一億総懺悔」をもじって「一億総白痴化」という造語を用いた。58年頃にはテレビのある家を順繰りに訪ねて歩く子供たちの「テレビジブシー」や、テレビを見過ぎる「テレビチャイルド」が教育問題として浮上した。テレビに対するこれらの批判や懸念は、テレビが各家

庭に一台を目指して猛スピードで増殖していくことへの警戒感に根差しており、テレビのない家がまだ膨大に存在していたために、テレビの非日常性に対する指弾の域を出ていなかった。したがって、テレビの真の脅威がまだみえてこないまま、批判は低俗番組や社会現象をやり玉にあげるかたちを取っていった。

テレビの低俗番組は以降もやり玉にあげられたが、しだいに勢いをなくしていった。それは低俗番組が減少したからではなく、逆に番組全体が低俗化していったからだ。つまり、テレビがまだ日常的になっていない間は低俗番組もまだ日常的になっていなかったが、テレビが日常化するにつれて、テレビそのものが低俗化していった。もちろん、テレビの真の問題は番組が低俗かどうかではなく、テレビの前に座っている我々が低俗になってしまふところにあった。我々の低俗さは低俗番組からやってくるよりも、テレビそれ自体の低俗さからやってくるといってよい。敗戦直後の困窮は人々を必死に食うことへと駆り立てていったが、食うことからしだいに解放されはじめると、戦前、戦中のあり方を内省しながら、自分の歩みと国家の歩みについて真剣に考えなくてはならなかった筈なのに、ちょうどそんな時期のとば口に差し掛かった頃、人々はテレビのプロレス中継で我を忘れてしまうほど熱狂し、以後身も心もテレビに支配されていくようになった。

テレビは我々の言語や生活のなかにつねに一定の位置を占め、テレビ抜きには何も始まらなくなるスタイルを我々のなかにしだいに確立し、我々が真に考えなければならぬことを阻害していった。というより、テレビに向き合うのに身も骨も必要としないスタイルは我々のすべてを貫き、身も骨も込められないバーチャルな世界へと我々を誘い、その場所に我々を放置した。そして我々の考えることには身も骨も込められなくなり、身と骨とで組み立てられる「肝心なこと」は我々のスタイルからは放逐され、どうしてもいいことには饒舌になり、「肝心なこと」には沈黙で遣り過ごすというのが、「国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」日本国の習性となっていた。

テレビはどんなに現実の場面を映しだしても、その本質的な性格にしたがって、すべて他人事のフィクショナルな世界として切り取ってしまう。観ているほうはそれでも時に熱中したり興奮するが、自分の身や骨はどうしてもそこに込めることはできない。自分の存在はたゆたったままである。「肝心なこと」に気づくためには、普段の思考の活発な働きが不可欠であり、テレビ的思考停止状態との真正面からの格闘を持続しなくてはならない。テレビに乗っ取られている日本人はテレビに乗っ取られている日本国家とたえず二重写しであり、一人一人の日本人が日本国民として日本国家をどう立て直し、「名誉ある地位を占め」て国際社会とかかわっていくのか、その主体たる我々が人間として、国民として自分をどう立て直していくのかに、すべてかかっていることを身をもって自覚するなかからしか問題は始まらないが、その自覚がたえず触発されるような関係を自分が働き、存在している場所でこつこつとつくりだすことが、これからの国民造り―国造りに向かって厳しく問われている。

2003年5月3日記